

大和 良輔¹⁾ 長江 浩朗¹⁾ 浦野 芳夫²⁾ 武市 幸子²⁾
町田 未央²⁾ 山下 理子³⁾ 藤井 義幸³⁾ 山下雄太郎⁴⁾

- 1) 徳島赤十字病院 形成外科
2) 徳島赤十字病院 皮膚科
3) 徳島赤十字病院 病理診断科
4) 徳島県立中央病院 形成外科

要 旨

眼瞼に腫瘍を形成し、アポクリン汗嚢腫 (apocrine hidrocystoma) と診断した3例を経験した。症例1は71歳女性で1年ほど前より右下眼瞼に褐色の腫瘍が出現した。近医で保存的に加療するも改善なく紹介受診となった。症例2は35歳女性で2年ほど前より右内眼角部に嚢胞状の腫瘍が出現した。症例3は45歳女性で2年ほど前から左外眼角部に腫瘍出現した。病理組織学的所見では二相性の上皮系細胞からなる嚢腫壁が存在し、内腔への乳頭状増殖を示す部位があり断頭分泌像を認めた。以上の所見よりアポクリン汗嚢腫と診断した。手術後の再発は認めていない。アポクリン汗嚢腫は、1964年に Mehregan が報告した良性腫瘍であり、中高年の顔面、特に眼周囲に好発する。赤褐色、青色、灰白色などの色調であり、表面は平滑で嚢胞状を呈する。臨床所見のみで診断は困難である。眼瞼周囲の嚢胞性腫瘍では鑑別疾患の1つとして念頭に置くべき疾患と思われる。

キーワード：眼瞼腫瘍，アポクリン汗嚢腫，apocrine hidrocystoma

はじめに

眼瞼周囲の腫瘍性病変は多岐にわたり診断に難渋する病変の1つである。今回、比較的まれなアポクリン汗嚢腫を3例経験したので報告する。

症 例 1

患 者：71歳，女性

主 訴：右下眼瞼の腫瘍

既往歴：高血圧，心房細動

現病歴：初診の約1年前に右眼に疼痛が出現し、近医眼科で治療を行い疼痛は改善した。その後、腫瘍が出現しステロイド軟膏剤で保存的に加療を行ったが改善なく当院眼科に紹介受診した。眼科より手術目的にて当科に紹介された。

現 症：下眼瞼の瞼縁中央部に赤色調のびらんとその周囲に小腫瘍を認めた (図1)。

治療と経過：下眼瞼を全層で楔状に切除し縫合した。



図1 71歳女性の下眼瞼皮膚腫瘍，中央部にびらんを認める。楔状に全切除を行った

術後3か月で再発は認めていない (図2)。

病理組織学的所見：病理組織検査では拡張した嚢腫が多発しており二相性の上皮と好酸性細胞の断頭分泌像を認めアポクリン汗腺嚢腫と診断した (図3)。

症 例 2

患 者：35歳，女性

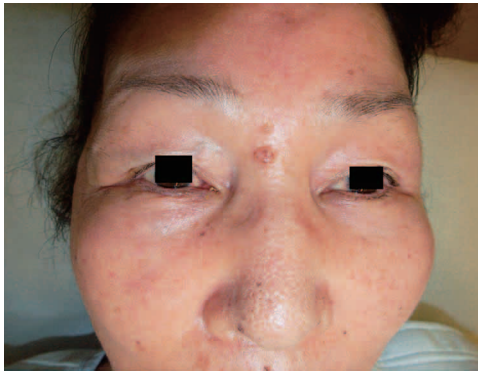


図2 局所再発を認めない

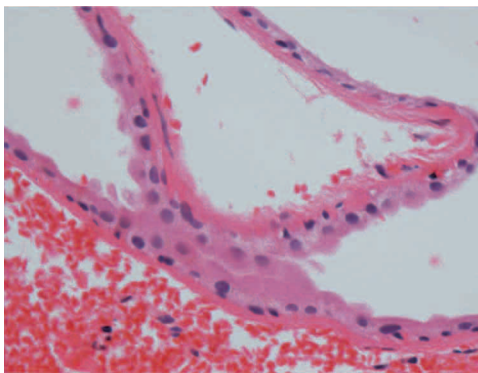


図3 一部筋上皮と二相性を示し、好酸性細胞の断頭分泌を認める

主 訴：右外眼角部の腫瘍

既往歴：頸部痛

現病歴：初診の約2年前に腫瘍が出現してきた。改善認めず近医皮膚科受診した。毛芽腫など良性腫瘍を疑われ、切除目的で当科に紹介された。

現 症：右外眼角部に3×5mm大の嚢胞性の腫瘍を認めた(図4)。

治療と経過：一部、周囲の皮膚を含め紡錘状に皮下脂肪層で切除を行った。術後1年経過したが再発は認めない。

病理組織学的所見：切除組織の病理所見では筋上皮と乳頭上に増殖する上皮細胞よりなる嚢胞壁を認めアポクリン汗嚢腫と診断した(図5)。

症 例 3

患 者：45歳、女性

主 訴：左外眼角部の皮疹

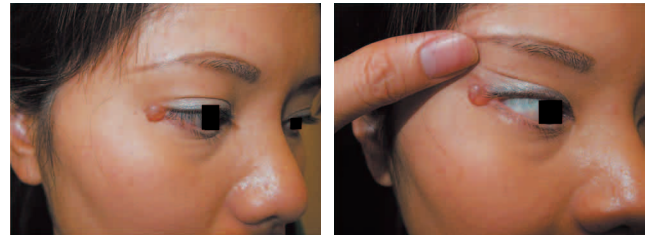


図4 3×5mmの透明な内容液を含む嚢胞性腫瘍を認めた。切除術を施行し縫縮した

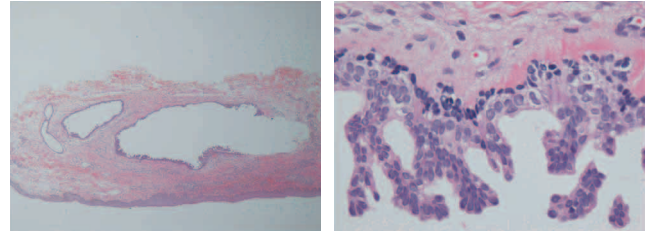


図5 筋上皮と乳頭状に増殖する上皮細胞よりなる嚢胞を認める

既往歴：甲状腺機能低下症、高血圧

現病歴：発症時期は不明であるが初診の2年ほど前には腫瘍が出現していた。近医皮膚科受診し、治療目的にて当院皮膚科に紹介された。

現 症：左外眼角部に隆起した褐色調の腫瘍を認めた。

治療と経過：ムチン沈着疑いにて生検施行した(図6)。追加切除について説明したが、患者本人に切除希望なく、終診となった。

病理組織学的所見：生検の病理組織像では、真皮下層の二相性の上皮細胞から構成される嚢胞で、嚢胞壁の外側は筋上皮細胞に裏打ちされている。断頭分泌像を認めアポクリン汗嚢腫と診断した(図7)。

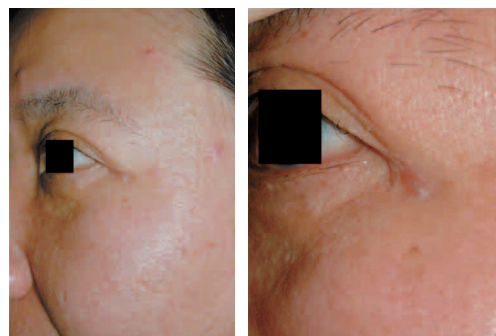


図6 左外眼角部に褐色の腫瘍を認めている

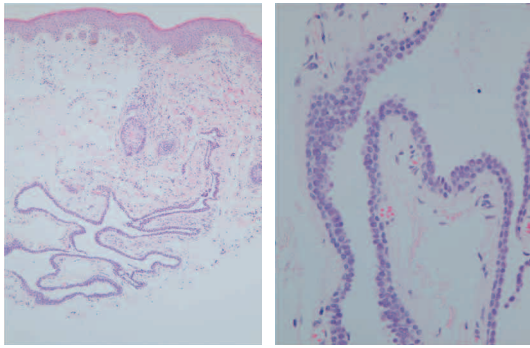


図7 二相性の上皮細胞からなる嚢腫で、断頭分泌像を認めた

考 察

アポクリン汗嚢腫は1964年に Mehregan が17症例について初めて報告した良性の腫瘍¹⁾で性差なく中高年に好発する。発生部位は頭頸部が全体の74%を占めており、そのうちの60%は眼周囲に生じる²⁾。赤色や青色、灰白色、黒褐色調、また正常皮膚色などのさまざまな色調を呈するが、光沢のある隆起性の単発性結節が多い、自覚症状がなく悪性化もないとされる³⁾。深谷らは1968年から2005年までの本邦で発生したアポクリン汗嚢腫の報告173例について検討を行い、30～60歳が全体の76%で、顔面発生例が63%、その中でも眼周囲が36%を占め、アポクリン腺の多い腋窩や会陰部の報告はむしろ少なかったと報告している⁴⁾。また、神山らは検索し得た55例の眼周囲発生例について上眼瞼、下眼瞼、外側に多いと報告している⁵⁾。

アポクリン腺は胎生期に毛原基より発生し全身に分布する。生後に退化していき、一部が腋窩、会陰部、乳輪、外耳道などに残存する⁶⁾。眼周囲に多い理由としては Moll 腺に由来するためという意見がみられる^{7), 8)}。その他の部位に発生する理由としてはアポクリン腺の原基の残存によるものが考えられている^{4), 5)}。

治療は単純切除であり手術切除症例での再発は無いと考えられている⁴⁾。

病理組織学的所見として、上皮と筋上皮の二相性の上皮細胞からなり、好酸性の嚢胞壁があり、アポクリン腺に特徴的な断頭分泌像が特徴的とされる⁹⁾。

自験例については、性別はすべて女性であったが、3例とも眼周囲の発生例であり、外側2例と、下眼瞼1例であった。臨床像は多様であり、1例目は前医で

治療していたこともあり発赤とびらん形成を認め、2例目は嚢胞状の腫瘍で3例目は褐色調の腫瘍であった。これらは終診となった3例目については不明であるが、1例目、2例目に再発は認めていない。病理組織学的には3例とも断頭分泌像と二相性の嚢腫壁を認め以上のことよりアポクリン汗嚢腫とした。

Vani らは、鑑別疾患として、表皮嚢腫や血管腫、面皰、視腺嚢腫などを挙げており、青黒色調のものは悪性黒色腫や基底細胞癌との鑑別が必要であると述べている¹⁰⁾。さまざまな色調を呈し臨床所見のみでの診断は困難である。非常にまれな疾患であるがアポクリン汗嚢腫も眼瞼に生じた腫瘍を経験したときに鑑別疾患の1つとしてあげる必要がある。

文 献

- 1) Mehregan AH: Apocrine cystadenoma: A clinicopathologic study with special reference to the pigmented variety. *Ach Dermatol* 1964; 90: 274-9
- 2) 伯野めぐみ, 海老原全, 多島新吾, 他: 前腕に生じた apocrine hidrocystoma の1例. *臨皮* 1994; 48: 1021-3
- 3) 清水宏: 新しい皮膚科学, 東京: 中山書店 2005; p364
- 4) 深谷佳孝, 三川信之, 檜垣浩一: 顔面に発生した apocrine hidrocystoma の3例. *形成外科* 2007; 50: 1041-6
- 5) 神山由佳, 曾我部陽子: アポクリン汗嚢腫の1例. *臨皮* 2011; 65: 973-6
- 6) 橋本謙: 解剖学・組織学・発生学. 北村包彦編「日本皮膚科学全書 第1巻 第1冊」, 東京: 金原出版 1958; p189
- 7) 富永晃広, 藤岡彰, 渥美淳一, 他: 鼻孔部に生じたアポクリン汗嚢腫の1例. *皮膚臨床* 1999; 41: 1161-2
- 8) 田村政昭, 永井弥生: Apocrine Hidrocystoma の1例. *皮膚臨床* 1997; 39: 1956-7
- 9) 泉美貴: みき先生の皮膚病理診断 ABC ②付属器系病変, 東京: 秀潤社 2007; p160-1
- 10) Vani D, Dayananda TR, Shashidhar HB, et al: Multiple apocrine hidrocystomas: a case report. *J Clin Diagn Res* 2013; 7: 171-2

Three cases of apocrine hidrocystoma occurring around the eyes

Ryosuke YAMATO¹⁾, Hiroaki NAGAE¹⁾, Yoshio URANO²⁾, Sachiko TAKEICHI²⁾,
Mio MACHIDA²⁾, Michiko YAMASHITA³⁾, Yoshiyuki FUJII³⁾, Yutaro YAMASHITA⁴⁾

- 1) Division of Plastic surgery, Tokushima Red Cross Hospital
- 2) Division of Dermatology, Tokushima Red Cross Hospital
- 3) Division of Diagnostic Pathology, Tokushima Red Cross Hospital
- 4) Division of Plastic surgery, Tokushima Prefectural Central Hospital

We examined three patients who presented with eyelid masses. In case 1, a 71-year-old woman presented with a brown mass on the right lower eyelid that persisted for a year. She attended our hospital after treatment provided by a local doctor failed to improve the condition. In case 2, a 35-year-old woman presented with a cyst-formed tumor on the right angulus oculi medialis that had persisted for 2 years. In case 3, a 45-year-old woman presented with a mass on the left angulus oculi lateralis that had persisted for approximately 2 years. The cyst walls consisted of two levels of epithelial cells, and there was a site indicating papillary growth into the lumen. Histopathological findings showed that the masses exhibited decapitation secretion, and a diagnosis of apocrine hidrocystoma was reached in all three cases. Following surgical resection, no patient showed any signs of recurrence. Apocrine hidrocystoma is a benign tumor first reported in 1964 by Mehregan. It develops on the face, especially around the eye, in the middle-aged and elderly. It can be dark reddish-brown, blue, or light gray in color, is smooth and commonly forms cysts. Diagnosis is difficult by clinical examination alone, and it should be considered as a differential diagnosis for cystic tumors appearing on the eyelids.

Key words: blepharophyma, apocrine hidrocystoma

Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal 20:102–105, 2015
